



EUS-FNAを実施する医師の顔。モニターには検査の様子が表示されている。検査は約200分かかる。

医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く!
ニッポンの医療現場 第18回

クローズアップ「最先端医療」Ⅲ
見つけにくい膵臓がんに一筋の光
早期発見の切り札「EUS-FNA」

今回ピックアップするEUS-FNA（超音波内視鏡下穿刺吸引術）は、聞き慣れない名前だが、難治性と言われる膵臓がんの早期発見に期待が持たれる手法だ。最近ではこれを用いた治療も行われつつある。まさにがん医療の「最新兵器」の一つといえる。

**2010年春に保険適用
 画期的な検査方法**

年間約2万5000人がかかり、ほぼ同じ数の患者が命を落としている膵臓がん。難治性と言われる所以は、早期発見が難しい上、周囲の臓器に転移しやすいからだ。食欲不振や腹痛、長く続くみぞおちや背中への痛み、腰痛、急激な体重減少などで見つかったときにはすでに進行しているケースが多く、手術ができるのは、ごく一部だ。

そんな難治性の膵臓がんの診断で期待されているのが、「EUS・FNA」だ。EUS・FNAは超音波内視鏡（先端部分に超音波装置がついた内視鏡）を使って膵臓の細胞を一部採取する方法だ。直径約1センチの超音波内視鏡を口から挿入し、モニターの超音波画像で、内視鏡の先端部分に付いた特殊な針を膵臓に刺し、細胞を吸引する。こうして採れた細胞は、組織検査に回し、がんかどうかを確認する。

2010年4月に健康保

いとうしゅんや●医療ジャーナリスト・写真家。国内外問わずさまざまな医療現場を積極的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多岐のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-to.tv/

険が認められたばかりのEUS・FNAを、国内でも早く取り入れた埼玉医科大学国際医療センター消化器内科の西村誠医師は、メリットについてこう話す。「EUS・FNAは、CT（コンピュータ断層撮影）などでは見つけにくい1センチぐらいの影も見つけられるので、早期のがんでも発見が可能。また問題のある場所の細胞を採るので、診断がつきやすいのです」

**検査時間は30分
 痛みもなく食事也可**

取材をした日、同センターの内視鏡検査室では、70代の女性が検査を受けてい



モニターには超音波内視鏡「EUS」で得られた膵臓の様子が表示されている。

た。別の病院でCT検査を受けたところ、膵臓にがんらしきものが写っていたため、ここで精密検査を受けることになったという。検査用のベッドに横になり、超音波内視鏡を口から入れている様子は、まるで胃カメラの検査。西村医師はもう一人の医師とEUS・FNAを実施。画像で膵臓の位置を確かめ、あやしい黒い影のサイズ（腫瘍径）を測る。3センチ×4センチだった。

「黒い影とその回りとの境界線があいまいで、内部の変化からもがんの可能性が高いですね。膵臓の外側にも広がっているのも分かります」（西村医師）

その後、画面を見ながら影に向けて針を刺し、細胞を吸引。位置を微妙に変えて3〜4回吸引をくり返す。細胞診の結果は早ければ2日後に出る。それをもとに治療方針が決まるといふ。

検査に要する時間はおよそ30分。静脈麻酔が必要だが、検査後は痛みがない。その日の

夜には食事がとれ、翌日には帰宅できる。患者にとっては侵襲が低い検査だ。膵臓がんの場合、腹部超音波やCT、MRI（磁気共鳴画像）、腫瘍マーカーといった検査が一般的で、確定診断のためにERCP（内視鏡的胆膵管造影）をすることもある。しかしこうした検査では早期発見は難しい。さらに西村医師はこんな問題も指摘する。「がんを見落とす危険性だけでなく、がんの疑いだけで手術をする例もあり、膵臓を取ってみて、がんではなかったことが分かるという悲劇も起きています」

**「EUS」を用いた
 最新治療の数々**

EUS・FNAは、超音波の画像だけを頼りに問題のある場所の細胞を採取するため確実だが、それ相應の経験が必要だ。膵臓に針を刺すので出血や感染症などの危険性もゼロではない。同科ではこれまで110人の患者に検査を実施、感度（陽性率）は約92パーセント。合併症は1例もないという。

EUS・FNAは主に検査で用いる手法だが、これに応用した治療「インターベンショナルEUS」も、国内外で行われ始めている。アメリカのEUSの第一人者である医師の元で技術を習得した西村医師は、EUSを用いた胆道ドレーナージ（胆管が何らかの理由で閉塞や狭窄した際、そこに管などを通して、胆汁の流れを良くする治療）や、EUS・CPN（腹腔神経叢ブロック。神経ブロックの一種）などを同科でも実施。なかでも、西村医師がいまもっとも関心を寄せているのが、EUS・CPNだ。「がん性疼痛のなかには、医療用麻酔を使っても抑えきれない痛みがあります。そのような場合でも、EUSを用いて膵臓や胃の裏にある太い腹腔神経叢にエタノールを注入すれば、痛みが軽減されるので、かなり痛みは和らぎます」

西村医師は、同センターの緩和ケア科より依頼を受けてこの治療を行う。効果



EUS-FNAで採取した細胞を細胞検査に出すため、専用のプレートの上に載せる。

は7〜8割だという。海外ではさらに一歩進み、EUSを用いて微量な放射線を発してがんを叩く小線源や、サイバーナイフ（ピンポイントに照射できる放射線治療）に必要な針を埋め込んだりしている。いずれも膵臓がんの新しい治療として、注目されている。もちろん、どんな優れた検査も治療も、我々が最初にかかると「かかりつけ医」がその存在を知らないことには始まらない。実際、治療格差は存在する。もはや患者自身が最新の情報を集めることが重要なのはいうまでもなく、普段から情報収集に心がけたい。

●細胞を採取し、造影剤を注入してX線撮影する方法